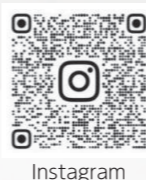




特集 がんの話をしよう —がん検診を受けましょう—

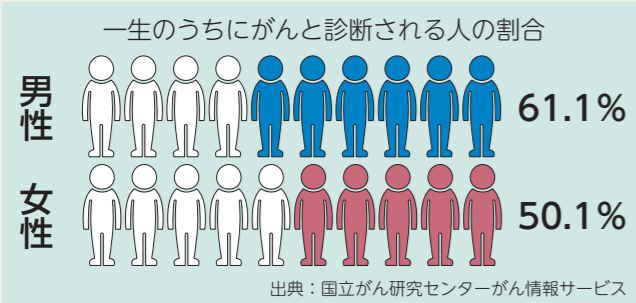
乳がんを経験し、乳がんサバイバーとして活躍する
たけうち かおり
竹内 香織 さん

38歳の時に乳がんりがんに罹患。左乳房部分切除を経て寛解。現在は、乳がんサバイバーとして入浴着普及活動に携わり、自身が立ち上げた下着ブランドのランジェリーデザイナーとしても活躍中。



Instagram

がんサバイバー…治療中、治療後経過観察中、再発や転移の人を含む、がんを経験しながら生きている人



がんは日本人の2人に1人が罹患し、男性は4人に1人、女性は6人に1人が亡くなるとされる身近な病気です。早期発見・早期治療により生存率の向上が期待され、刈谷市でも早期発見によりがんを克服して元気に暮らしている人が多くいます。今回は、実際にがんを経験した人へのインタビューから、がん検診を受けることの大切さを考えます。

問健康推進課 (☎23-9559) ID1003361

竹内さんが経験した がんの話

診断される前のがんのイメージ

がんは特別な人になるものだと思っていましたし、地球が減んでも自分は生き残ると思うくらいに、健康には自信がありました。がんがんにに罹患するとも思っていなかったのが、会社の健康診断は受けていましたが、がん検診は考えたこともなかったです。

自覚症状と受診までの経緯

夫の仕事でベルギーに住んでいた時に、芸能人の乳がん体験談をテレビで見ました。「梅干しの種のような感触があった」という話があり、そんなこともあるんだと半信半疑で右側の乳房を触ってみたら、同じような違和感があったので、すぐに現地の病院を受診しました。しかし、外国語でのやりとりが難しく、医師からは「おそらく悪くない」という曖昧な説明しかされず、不安が解消されませんでした。精密検査を受けるために一時帰国し、再度病院を受診しました。

がんの宣告と心境

自己触診で気になったのは右側の乳房でしたが、実際にがんが見つかったのは左側の乳房でした。ドラマのように家族同席での宣告を想像していたのですが、医師からは「乳がん。中でも悪性の腫瘍」とさりと伝えられました。非常に戸惑いましたし、ショックも大きかったです。診察室を出た時の、足に力が入らず、ぐにゃと視界がゆがむような感覚をいまだに覚えています。その後検査を進めていくと、高悪性であることや、3.5cmの腫瘍があることが判明しました。

“まさか私のがんになるなんて思っていませんでした。”



「手術をする」という決断

がんが見つかったからは、脳や肺に転移したらどうしよう、というのが一番不安で怖かったです。医師から手術が必要であること、万が一、転移した場合も含めて抗がん剤などの化学療法や放射線治療が効かないことを宣告時に伝えられました。また、部分切除なのか全摘出なのか、手術をしてみないと分からないと説明を受けました。乳房を切ることは女性としてショックなことです。治療せずそのまま生きていこうかなと考えたこともあります。しかし、乳房を残したとしても、全身にがんが広がり、痛みが出て、家族にも迷惑をかけたとしたら、「こうするべきじゃなかった」と後悔すると思いましたし、病院に付き添ってくれた妹が「切ったら生きられるよ」と言ってくれたこともあり、手術を受けることを決意しました。

乳がんサバイバーとしての活動

闘病生活中に感じた悔しさから、下着ブランドを立ち上げました。また、現在はがん患者の人などが集まれるコミュニティを2つ運営しています。活動に参加する人の中には、自分のことについて相手や場所によって話す内容を考えなければならないことに辛さを感じる人も多くいます。そのような方に、「がんについて話せる場や話さなくても気持ちを共有できる場があること」をこれからもっと伝えていきたいです。

入浴着を着てお風呂に入ろう会

入浴着を着てお風呂に入り、乳がんのセルフチェック講習を行い、みんなで昼食を食べます。もっと多くの人に入浴着を知って、体験して、もう一度お風呂を楽しんでほしいです。
場天然温泉かきつばたなどの温泉施設
対手術痕や乳房切除などで外見に変化がある人など
他開催情報はInstagramをご覧ください。



闘病生活と家族のサポート

手術は部分切除だったので、想像より乳房を残すことができませんでした。術後は傷口への刺激が少ない下着を着ける必要があるのですが、病院でカタログを見た時に、一生がん患者であるということを感じやすいデザインのものも多く、辛い気持ちになりました。病気と戦いながらもできるだけ美しく着られるものが欲しかったので、宣告の時から泣いたことはなかったのですが、その時は悔しくて号泣しました。
夫は当時、仕事を辞めて帰国を考えるほど衝撃を受けていたようですが、私の前では「全力で治していこうね」と気丈に振る舞ってくれました。毎日連絡をくれたり、旅行のチケットをプレゼントしてくれたり、そういう気遣いが1日でも早く治そうと思えるきっかけになりました。がんになると、当事者だけでなく家族にも大きな負担がかかるのだと痛感しましたね。

街かど保健室〜つむぎ〜

参加者同士が自由に語り合い、闘病に伴う不安や悩み、気持ちを共有できる場です。
場十朋亭
対がんサバイバー、家族、遺族など
他開催情報はInstagramをご覧ください。



がんになって今、思うこと

活動を通じてお会いする人の中には、自覚症状を放置したことで受診が遅れた結果、全摘出と抗がん剤治療になってしまい、早期に受診しなかったことを後悔している人もいます。若い人にも、自分の健康をチェックするくらいの気楽さでがん検診を受けていただきたいです。また、がんがんにに罹患するまでは、一人で生きてきたつもりでしたが、がんがんにに罹患して「人に助けられて生きていること」を改めて実感しました。今は、お風呂に入ろう会でも街かど保健室でも、「つながること」がとても大事だと思って活動しています。
最期は平等に命が尽きる中で、今の一番若くて美しい、大切なこの時期をどう生きるか考えてほしいですし、考えさせられる人になりたいと思います。